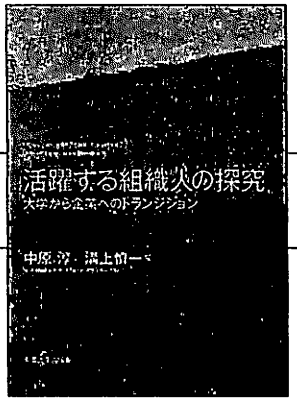
この本では、組織社会化（個人の企業への適応）研究の枠を超え、企業に参入する以前の「教育機関に所属していた時代の個人の意識・行動」と、「参入後に担うキャリアや組織行動」の二項関係を探求したと、中原氏は研究の先進性を主張する。

溝上氏は、職業生活や社会生活でも必要な「汎用的技能」を学士力の一環として定めた「学士課程答申」（2008年中教審答申）や米国の国家レポート『学習への関与』（1984年）を引き、「学生の学びと成長の実態や構造」、さらにはトランジションとの関係を明らかにする必要を説く。単に就職できたかどうかではなく、就職後の適応状況を見なければならないと言うのである。そのため、氏は、大学生調査のほか、2007年から追跡調査を含めて3年ごとに25歳から39歳の職業人3000人を対象にインターネット調査を行った。質問項目は、高校・大学での学習・生活・キャリア意識等と、職場での仕事の仕方についてである。



活躍する組織人の探究
大学から企業へのトランジション

中原淳、溝上慎一　編
3888円　東京大学出版会
☎03-6407-1069

調査結果からは、とくに大学1・2年生時におけるキャリア意識及び自主学習や主体的な学修態度が組織への適応に結びつくことが明らかになった。クラブ・サークル活動やアルバイトによる「豊かな人間関係」については、「良好な友達づきあい」以上の質が求められ、異質な他者からの影響が大きいことが示唆された。なお、「勉学第一」とした者は良い結果にならなかった。

これらは、教師が直感的には感じてきたことではないか。生徒の生涯の充実を考えた教育、学校から社会の組織への移行と適応を支援する教育を行うためには、これらのデータは示唆に富むと考える。

（聖徳大学教授・西村美東士）